様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６９３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３２６９

研究課題名（和文）慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラムの検討

研究課題名（英文）Examining a Nursing Support Program that would Improve the Self-care Agency of Patients with Chronic Illness

研究代表者
本庄　恵子（Honjo, Keiko）

日本赤十字看護大学・看護学部・教授

研究者番号：７０３１８８７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、セルフケア能力の質問紙（Self-care Agency Questionnaire、以下、SCAQ）を活用する「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」を作成し、その成果を検討した。慢性病をもつ人のSCAQの得点は、この支援プログラムの実施後に有意に高くなっていた($p<0.05$)。支援プログラムの展開により、看護師は、患者の生活に目を向けて一人ひとりに合わせた理想とする看護ができるという実感を得ていた。この支援プログラムは、セルフケア能力を高める看護支援として有効であることが示唆された。今後は、本プログラムのロールモデルを含めた視覚教材を充実させていきたい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop, utilizing a Self-Care Agency Questionnaire(SCAQ), a nursing support program that would improve the self-care agency of patients with chronic illness and to examine the outcome. Comparison of the SCAQ scores of such patients before and after implementation of the support program revealed significant improvement after the program($p < 0.05$). The nurses who took part in the program felt that they were now able to provide nursing that they believe to be ideal, being better tailored to individual patients due to a closer focus on the patient's lifestyle. The results suggested this nursing support program to be effective in supporting nursing that aims to improve patients' self-care agency. I intend to enchance video-based teaching materials that demonstrate acutual nursing scenes in the future.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：セルフケア　セルフケア能力　慢性病　看護　支援プログラム

１．研究開始当初の背景

慢性病を持つ人のセルフケア能力は、慢性病をもつ人々がより良い生活を行うために必要な力として注目されている。一般に人々は、健康問題について自ら対応する潜在的な力を持っており、それを発揮できるようなケアが重要であると指摘されている。長期にわたる健康管理が必要とされる慢性病をもつ人に対しては、セルフケア能力を高めるような看護支援が重要であるといえる。セルフケア能力を高めることは、合併症などの出現を防ぎ、疾患をもちながら慢性病をもつ人が「こうありたい」と望む生活をおくることにつながると考える。

セルフケア能力を評価する指標は、海外ではいくつかの質問紙が作成されている。日本における慢性病をもつ人のセルフケア能力を評価するための指標は、日本の文化的背景の考慮や慢性病をもつ人びとの状態の考慮がなされているものでなくてはならない。著者は、これまでに日本における慢性病をもつ人びとのセルフケア能力を査定する質問紙（Self-care Agency Questionnaire、以下、SCAQ とする）の作成に取り組んできた。SCAQ は、５つの構成概念【健康に関心を向ける能力】【選択する能力】【体調を整える能力】【生活の中で続ける能力】【支援してくれる人をもつ能力】をもつ、30 項目の質問紙である。SCAQ の Cronbach's αは、0.93 であり、内的整合性が高く信頼性が支持されている。

SCAQ は、これまでに複数の看護研究者や看護実践家に活用されてきた。SCAQ を使用した看護支援では、看護師が患者の「主体的な取り組み」としてのセルフケアを支えていくことや、看護師が患者と共に生活を振り返るステップが重要であることが示唆されている。このことをふまえて、著者は、SCAQ をより効果的に看護実践で活用してもらうために、平成 20 年度に「SCAQ の使用手順書」を作成した。この使用手順書は、「セルフケア能力を考えるときの前提（哲学的な考え方）」「具体的な使用手順」「よくある質問への回答」を含んでいる。そして、平成 21～22 年度にかけて、SCAQ と使用手順書を用いた看護ケアに関する調査を実施した。その結果、SCAQ を活用して看護師と慢性病をもつ人が生活を振り返ることは、慢性病をもつ人の生活エピソードの確認や、「できそう」と患者が思える方法を共に探す手立てとなることが明らかとなった。SCAQ と使用手順書を用いた看護ケアは、セルフケア能力を高める支援となり得ることが示唆された。

これまでの研究成果を踏まえて、本研究では、SCAQ の使用手順書を発展させる形で、SCAQ を活用した「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」を作成し、洗練したいと考える。そして、この「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」を展開し、その効果について検討したい。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 3 点である。

（１）SCAQ を活用する「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」を作成し、その妥当性を検討する。

（２）「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」を展開し、その効果を検討する。

（３）「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の視覚教材を作成し、その妥当性を検討する。

３．研究の方法

(1)SCAQ を活用する「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の妥当性の検討

① SCAQ を活用する看護支援プログラム

SCAQ を活用する「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」は、「１.疾患をもつ人に SCAQ に回答してもらう」「２．看護師が SCAQ の回答傾向を把握する（強みと支援が必要な部分を見出す）」「３．疾患をもつ人と看護師が話し合う時間をもつ（生活に合わせてセルフケア能力を高めるような支援の展開）」というプロセスを含む。この看護支援プログラムの具体的な方法等を記載した、紙媒体の資料「セルフケア能力を高める看護支援プログラム」を作成した。

② 参加者

看護師:この支援プログラムに関心をもち、調査協力への同意が得られた者。

患者:SCAQ を活用した看護支援をうけたことがある人で協力への同意が得られた者。

③ データ収集方法と分析方法

看護師:資料「セルフケア能力を高める看護支援プログラム」を事前に渡し、グループ・インタビューもしくは個別インタビューを実施した。インタビューでは、「支援プログラムに関する意見や感想」「SCAQ 得点と共に押さえておきたい検査データ」などについて尋ねた。質的記述的な分析を行った。

患者:SCAQ を活用したセルフケア支援をこれまでにうけたことがある患者に、「支援を受けた感想」「よかったこと」「改善してほしいこと」等を尋ねた。質的記述的な分析を行った。

④ 倫理的配慮

所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得たうえで研究を実施した。

(2)「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の効果の検討

①参加者
調査協力への同意が得られた看護師と患者に「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」に沿って支援を展開してもらい、質問紙調査を実施した。また、この支援を展開した看護師で調査協力への同意が得られた者に面接調査を実施した。
②データ収集と分析方法
質問紙調査では、支援プログラムの前後でSCAQ の得点がどのように変化するかを経時的に追い、有意差を検討した。面接調査では、支援プログラムを展開した看護師に、支援の体験などを尋ねる半構成的なインタビューを実施し、質的記述的に分析した。
③倫理的配慮
所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た上で調査を実施した。

(3)「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の視覚教材の妥当性の検討

①視覚教材
看護支援プログラムに関する視覚教材「SCAQ を活用したセルフケア能力を高める支援(DVD)」を作成した。この視覚教材は、講義編 26 分、ロールモデル編 29 分の 2 枚組の視覚教材である。ロールモデル編は、軽症脳梗塞の患者の事例の支援に関するもので、具体的な支援場面のモデルが伝わるように作成した。尚、この事例は、研究者らが創作したものであり、実例ではない。また、この DVD は営利目的で作成したものではなく、非売品である。視聴希望者には、貸し出しをしている。
②参加者
視覚教材を見た看護師の中で、研究協力の意思がある者を参加者とした。
③データ収集と分析方法
インタビューガイドに基づき、「視覚教材を見た感想や印象」「実践に役立つか」などについて尋ねる半構成的なインタビュー調査を実施し、質的記述的に分析した。
④倫理的配慮
所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

(1)SCAQ を活用する「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の妥当性の検討

① 看護師へのインタビュー結果
研究協力への同意を得た 4 施設の合計 20 名の看護師を参加者とした。グループ・インタビューを 6 グループ（合計 19 名）、1 名に対しては個別面接を行った。
結果、支援プログラムの内容は、全体としてセルフケア支援を行う上で必要な内容と手順が含まれており、概ね妥当であることが示唆された。また、心不全・循環器、腎不全、糖尿病、脳血管疾患、呼吸器疾患のケアを専門とする看護師より、SCAQ とともに得ておくと良い検査データについて示唆を得ることができた。支援プログラムに追加があると良いとされた内容として、【支援を開始する時期】【継続して関わる体制】【看護師をサポートする体制】があげられ、これらを追加していくこととした。そして、紙ベースのプログラム案に加えて【ロールプレイの視覚教材】を希望する意見がだされた。
視覚教材の作成については、3 年間の研究全体の目的の 3 つ目に追加し検討していくこととした。
② 患者
研究協力への同意を得た 2 施設の合計 9 名の患者を参加者として、個別面接を実施した。患者は、SCAQ を活用した支援を以前受けたことがある患者で、現在外来通院中の者であった。結果、この支援を受けたことで、病気や生活を【振り返る機会になった】と語り、今でも【決めたことを続けている】と語る人がいた。一方で、【支援されたと感じていない】人もいることが明らかになった。支援されたと感じていない背景には、SCAQ を活用した支援内容についての説明が十分なされていないことがあると考えられた。今後、看護師に望むこととしては、このような支援を多くの患者が受けられるようにしてほしいとのことで、【看護師の支援の時間の確保】の要望が出された。また、この支援プログラムの意図するところか患者に十分に伝わると、患者もより主体的にこのプログラムに参加できるということから、【支援についての説明】を最初に十分にしておくことの重要性が示唆された。

(2)「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の効果の検討

① 質問紙調査
「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」に沿って支援を展開してもらい、看護支援プログラムの効果を検討した。支援の展開と 2 回以上の質問紙調査に協力が得られた 16 ケースで、支援プログラム前後の SCAQ の有意差を検討した。
結果、SCAQ の全体の合計点、および構成概念の「選択する能力」「生活の中で続ける能力」「支援してくれる人をもつ能力」は、支援後に有意に得点が高くなっていた（$p<0.05$）。このことより、この看護支援プログラムの効果が示唆された。

② 面接調査

調査協力への同意が得られた 15 名に面接調査を実施した。結果、看護師は、SCAQ の回答傾向から患者とともに生活を振り返る支援を通して、検査データなどにとどまらない広い視野で【患者の生活を捉えることができる】という体験をしていた。そして、「患者と一緒に考える」という看護師の支援のスタンスの変化に伴い、【看護師が変わり患者も変わる】という体験をしていた。また、病気の告知を受けて間のない患者を受けもった看護師は、相手の反応を確かめながら、低い得点項目についてどこまで話を深めるかを慎重に見極め、【疾患の受容に応じて慎重に支援内容を選ぶ】という体験をしていた。回復期にあり退院が近い患者には「生活行動の自立ができるようなセルフケア」に向けた支援を、そして、同じ患者が終末期になった場合には「安楽を得るセルフケア」に向けた支援を展開するなど、【病状や症状に応じてセルフケアの焦点は変わる】という体験をしていた。

さらに、看護師は、セルフケア支援が難しいと感じるケースにこそ、SCAQ を活用した対話を通したこの支援プログラムを展開することが、疾患をもつ人の思いを知り一人ひとりに合わせた支援につながると考えており、【支援にチャレンジする】体験が語られた。この看護支援プログラムの展開を通して、看護師は、慢性疾患をもつ人一人一人に合わせた【理想とする看護ができる】という体験をしており、このことが【看護する喜びややりがい】を実感することにつながっていた。

以上から、この看護支援プログラムの展開は、慢性病をもつ人の思いや生活を知ることができるプログラムであり、疾患の受容や患者の状態など患者一人ひとりに合わせたセルフケア支援のガイドになると考えられた。そして、この看護支援プログラムは、看護師にとって喜びややりがいを感じられる支援のガイドとなり、看護師のモチベーションを高めると考えられた。

(3)「慢性病をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援プログラム」の視覚教材の妥当性の検討

3 施設で合計 19 名の看護師にインタビューを実施した結果、以下のことが明らかとなった。

① 講義編

講義編に関しては、内容的にわかりやすく、セルフケア支援の目的が明確に伝わるものであり、【セルフケア支援を行う糸口】になり、使ってみたいという【支援意欲が高まること】が語られた。具体的に印象に残ったところは、「できることを一緒に探す」「強みをのばす」といった【セルフケア支援の要点】であることや、【支援導入時に説明する意味】の理解が深まったということが語られた。また、家族も含めてのセルフケア支援という【日本文化を踏まえた支援】が印象に残っていた。この DVD を使い【セルフケア支援を広めたい】と実際に病棟全体で使いはじめているという参加者もいた。

② ロールモデル編

ロールモデル編では、実際の患者と看護師のやりとりの場面をとおして【セルフケア支援の具体的な理解の深まり】【具体的な支援のイメージがつく】【全体の流れがわかりやすい】という意見が多く寄せられた。特に印象に残ったこととして、ロールモデル編の看護師の【説明の仕方】【質問の投げかけ方】【間のとり方】を通して、【患者自身で主体的な選択ができるような関わり】が大切であることとその具体的な方法が理解できたとされた。このように、視覚教材により具体的な支援方法を学ぶことによって、【自分の支援で生かせた】ということが語られた。そして、そのような支援をとおして、【患者と向き合う時間の大切さ】を感じる者もいた。

一方で、患者と一緒にできることを探していく支援は【看護師の力量】による部分があるのではないかと、難しさを感じている者もいた。今回は軽症脳梗塞患者を例にした視覚教材であったが、呼吸器や腎臓内科など他の疾患のケースや、指導を拒絶するような難しいケースなどの支援場面について教授するような【ロールモデルの追加】に関する希望があった。

以上の結果より、視覚教材の講義編、ロールモデル編は、ともに看護師のセルフケア支援のガイドとして有用であることが示唆された。今後は、疾患の種類や事例のバージョンを増やして、さらに視覚教材を開発することが課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 本庄恵子・野月千春（2013）「慢性疾患患者のセルフケア能力を査定する質問紙「SCAQ」の外来支援への活用」継続看護時代の外来看護、査読無、18(4)、43-55.

② 本庄恵子・野月千春・本舘教子（2013）「新しいセルフケア支援の探求：みゆきの里におけるセルフケア支援の意味」看護実践の科学、査読し、38(13)、 52-58.

③ 本庄恵子（2012）「セルフケア能力を高める支援　－人々のもつ力に焦点をあてて－」 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌、査読無、16(4)、295-299.

④ 本庄恵子・野月千春・本舘教子・酒井礼子（2012）「看護の技の新たな挑戦　－セルフケア能力を高める技－」日本看護技術学会誌、査読無、11(1)、32-37.

⑤ 本庄恵子（2011）「慢性疾患をもつ人のセ

ルフケア能力を高める看護支援　-SCAQを活用した看護支援の試み-」日本慢性看護学会誌、査読無、5(1)、p.16-18.

〔学会発表〕（計8件）

① 本庄恵子(2013)「全人的ケアとヘルスケア；セルフケアを動機づける看護」、第17回日本統合医療学会東京大会、2013年12月22日、東京.
② Keiko Honjo, et.al.(2013)“Experience of Nurses Using Self-Care Agency Questionnaire in a Nursing Support Program Deployed to Improve the Self-care Agency of People with Chronic Illness”the 3rd World Academy of Nursing Science, 2013年10月18日、韓国、ソウル.
③ 本庄恵子、他6名（2013）「セルフケア能力を高める支援プログラムの展開が看護師に与える影響：支援導入3年未満の施設に焦点をあてて」、第12回日本看護技術学会、2013年9月15日、浜松市.
④ Keiko Honjo（2013）“VALIDITY OF NURSING THAT AIMS TO IMPROVE SELF-CARE AGENCY BY UTILIZING SCAQ： FOCUS ON CHRONICALLY ILL PATIENTS’PERSPECTIVE” The 16th EAFONS：Developing International Networking for Nursing Research, 2013年2月21日、タイ、バンコク.
⑤ 本庄恵子、他6名(2012)「セルフケア能力を高める看護支援プログラム案の検討－ SCAQを3年以上使用している部署の看護師に焦点をあてて－」第11回日本看護技術学会学術集会、2012年9月16日、福岡.
⑥ 本庄恵子（2012）「教育講演：セルフケア能力を高める支援　－　人々のもつ力に焦点をあてて－」 第21回：日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会、2012年5月12日、神戸市.
⑦ 本庄恵子、他3名（2011）「新たな挑戦としての「セルフケア能力を高める看護の技」-SCAQを使った看護支援プログラム-」第10回日本看護技術学会学術集会、2011年10月30日、東京.
⑧ 本庄恵子、他5名（2011）「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践の内容とセルフケア能力の変化-看護支援導入時のスキルとSCAQ得点の変化-」第10回日本看護技術学会学術集会、2011年10月29日、東京.

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　無し

６．研究組織
(1)研究代表者
本庄　恵子（ HONJO, KEIKO ）
日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70318872

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し

(4)研究協力者
野月　千春（NOZUKI, CHIHARU）
東京厚生年金病院・看護部・看護副部長
末永　真由美（SUENAGA, MAYUMI）
関東学院大学・看護学部・講師
本舘　教子（MOTODATE, NORIKO）
聖マリアンナ医科大学病院・看護部・看護副看護部長
古川　祐子（FURUKAWA, YUKO）
日本赤十字社医療センター・看護部・看護副部長
酒井　礼子（SAKAI, REIKO）
東京厚生年金病院・看護部・看護師長
今野　康子（IMANO, YASUKO）
日本赤十字社医療センター・看護部・副看護師長
大内　理恵（OOUCHI, RIE）
東京厚生年金病院・看護部・主任
近藤　仁美（KONDOU, HITOMI）
聖マリアンナ医科大学病院・看護部・主任